

論壇

均等な教育機会が緩和

欧州や米国での政治の動きの背景には格差の拡大がある。グローバル化や市場原理の拡大によって、一部の人たちに富が集中し、多くの人が自分たちは貧しくなっていると感じている。現実には、こうした貧富の差はグローバル化の結果というよりは、技術の変化による部分が大きい、というのが専門家の間の基本認識である。ただ、原因はどうか、格差問題に本格的に取り組まない限り、政治的な安定は望めない。

いつの時代でも、どの国でも、

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

経済的な格差が生まれることを避けることは難しい。どうしても、経済的に成功すると、そうではない人が出てくるからだ。格差の発生には避けがたい面があるとしても、より重視しなくてはいけないのは、格差の固定化という問題である。親の世代が貧しいと、子供は十分な教育を受けることがで

であった。相続税が他の国に比べて比較的高いことが、その理由の一つだ。親が人並み外れて多くの資産を持つていけば、それを相続する子供たちはたくさん税金を払わなくてはならない。一部の資産家が相続税を避けるためシンガポールや香港に移住することからも分かるように、日本の相続税は

世代超えた格差の固定化

まず、貧困が親から子供に伝播する。こうした世代を超えた格差の固定化が続くことが問題だ。貧しい家に生まれ子供たちが将来に希望を持っていないような社会が繁栄するはずはないのだ。

日本はこれまで、比較的にこうした格差の固定化が起きにくい社会

諸外国よりも重い。しかし、このような相続税が格差の固定化を防いできたのだ。

日本で格差の固定化が起きにくかったもう一つの理由は、多くの人に教育機会が開かれていたことだ。公立の高校や大学の授業料が欧米に比べて安かったことは、貧

しくても優秀な若者に、より高い教育機会を提供することになった。貧しい家に生まれても、その努力をすれば高い教育機会が得られたのだ。

貧困の深刻さ、日本に影

残念ながら、最近の日本では、少しずつ格差の固定化が進んでいるように見える。多くの専門家が、子供の貧困の深刻さを指摘している。塾や私立学校の高い教育費は、結果的に貧しい家庭の子供がより高い教育を受ける機会を狭めている。豊かな家に生まれた子供たちは高い教育を受ける機会に恵まれているが、貧しい家に生まれた子供はそうした機会が持てない。こうした状況が続けば、格差の固定化が進むばかりだ。

教育は子供たちに未来の無限の可能性を提供してくれる。貧しい家に生まれたからといって教育の機会を奪われるようなことがあってはならない。今、政策の現場でも、幼児教育の重要性の確認、高等学校の無償化、大学の奨学金の充実などの議論が行われている。

こうした政策を進めていくことは、一人一人の子供たちにより多くの機会を提供するだけでなく、格差が固定化しないダイナミックな社会を作ることにも繋がっていくのだ。格差が固定しているように見える欧州や米国を反面教師にして、教育のあるべき姿を真剣に議論するべき時期に来ている。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。